

鍾馗兵団・独立混成

内田大隊江口隊

山形県 清野 久次郎

私は温泉町の山形県東根市の農家の長男に生まれました。物心ついた頃、長女である姉は奉公に出されて家にはいなかった。弟が三人いて、祖母と両親を含めて七人家族であった。両親は主として米を作りながら副業に葉煙草を作っておりました。当時は米よりも葉煙草が良い収入になったようです。収入が多いから近所の農家も競って葉煙草を生産して専売局へ出荷したものでしたが、現在は外国産にお株を奪われて煙草畑は見当らなく

日を追って上等兵に進級し、初年兵の教育助手などを務めていましたが、中隊に移動命令が出て一個中隊六十人ほどで青森県の八戸市に移動して、山の中に幕舎を張って居住しました。

山の峰伝いに大きな穴を掘って、コンクリートで陣地を構築する作業でした。コンクリートの骨材にする砂利や砂を山の上に運ぶために民間の馬車が数十台集められました。私はその総指揮官を命ぜられて、毎日土ぼこりにまみれながら運搬作業に従事しました。

約四カ月ほどして原隊復帰を命ぜられ、全員山形の原隊に帰りました。

昭和十九年十二月十日、動員令が出て南支派遣となり、夜になってから窓一つない貨車に乗せられて山形駅から出発しました。窓が無いのでどこを走っているのか全然分かりませんが、着いた所は博多駅でした。直ぐに港へ行き貨物船に乗せられました。

私は米軍の戦闘機や魚雷艇の見張りを命ぜられ

なりました。

私は尋常高等小学校を卒業すると、家業の農業を手伝いながら青年学校に通いました。学校とは名ばかりで、勉強よりも銃剣術等の軍事教練が毎日の日課でした。これが軍隊に入隊してから大変役に立ちました。

大東亜戦争が始まった翌年の昭和十七（一九四二）年五月に教育召集を受けて、山形市の北部十八部隊に入隊しました。新兵であっても郷土部隊であり、顔知りも多い故か鉄拳制裁等もありませんでした。三カ月で召集解除となり、家に帰って農業を続けておりました。

一カ月ほどしたら、また召集令状が来て、山形北部十八部隊第一大隊第二中隊に入隊しました。

て、甲板に出ていました。出航して間もなく海が大荒れとなって玄界灘にさしかかった時は船が木の葉のように揺られて、何にかまっても立ってられない有様でした。ほとんどの兵隊が、飯も食えないほどでひどい酔いになりましたが、悪天候が幸いして敵機の攻撃もなく、無事に釜山港へ着岸する事が出来ました。

釜山に上陸してまた貨車に乗せられて、山海関を通過、北京、南京を経て上海に近づいた頃に米軍の戦闘機に銃撃されました。有蓋貨車であったので兵員には被害は無かったのですが、機関車がやられて動かなくなり、交替の機関車が来るまで四時間も貨車の中に閉じ込められ、待たされました。

何とか無事上海に着いて、また貨車で砲台湾と言う所に行き、そこで一カ月位筏作りをさせられました。直径十二センチ位の丸太を一メートルほどの長さに切って筏を組むのです。作った筏は鉄舟の屋根の様に取りつけて敵機の銃撃から身を守

ると言う弾除けに使うのだ、と聞かされて、頭の
良い人もいるものだと関心しました。一カ月ほど、
ここに駐留してその作業に従事しました。

そこから海南島に向けて鉄舟で出航しましたが
敵の攻撃が激しいので、止むなくスワ島に上陸し
ました。鉄舟から降りる時は縄梯子でした。スワ
島に一カ月ほど駐留して、毎日防空壕掘りをさせ
られました。そこから歩いて四百キロ、約百里の
道程です。軍隊で言う百里行軍です。一口に百里
と言いますが、誰もいない所と違って敵中ですか
ら、どこから狙撃されるか分からない、本当に命
がけの行軍でした。

それから何と言う駅か名前は忘れましたが、全
員無事にその駅に着いて、そこから無蓋貨車に乗
せられて、今度は中国名で東莞と言う所に着きま
した。大隊本部のある所で、小高いなだらかな丘
のような山が在りました。

この地で警備の勤務に着きました。大隊長は九
州出身で内田少佐殿でした。郷土の米沢出身のE

昭和二十一年四月に中国名で「シユコー」と言
う所から日本の貨物船で出航しました。乗組員も
日本人でした一週間位で横須賀港に到着して上陸
し、駅から汽車に乗り懐かしい我が家に無事復員
することができました。

復員してからは食糧増産のために農業に専念し
て、昭和二十二年に結婚し、娘と息子も二人生ま
れました。しかし昭和三十三年に妻が病に冒され
て先立ちましたので、その後現在の妻と再婚して
農業を継続しておりました。今では高齢になりそ
の作業も大変になり、サクランボとリンゴなど果
樹園のみにして、田圃は全部小作に出しました。
子供たちはそれぞれに家庭を持って独立しており、
長男が近くに新居を構えておりますので、孫や曾
孫が時々遊びに来て顔を見せてくれますので、充
実した余生を妻と共に楽しんでおります。

中尉殿は中隊を引き連れて宣撫工作に従事してお
りましたが、ある日、川を舟で移動中に敵の密偵
に密告されて奇襲攻撃を受け、中隊全員（六十人）
もろろん中隊長も含めて名譽の戦死を遂げられま
した。

当日、私は木村少尉殿と事務連絡のために広東
市に行っておりましたが、帰途その連絡を受けて
心の凍る思いで、足が地に着きませんでした。中
隊に戻ってからの話ですが、E中尉殿とS軍曹殿
の遺品がそっくり残っていたので、二人は拉致さ
れたのではないかとのことでしたが、真相は分か
りませんでした。

昭和二十年三月、兵長に進級して鐘馗兵団に属
し、独立混成内田大隊江口隊に転属して、広東省
東莞で警備勤務に着きました。八月十五日の終戦
は、十八日になってから戦友に教えられて日本の
敗戦を知りました。そこから各隊が分散してお寺
のような大きな建物の前にテントを張って居住し
ました。

湖南省の警備隊にて

長野県 上原 保雄

私は大正十一（一九二二）年十一月十二日、長
野県東築摩郡塩尻町下大門五五番地で父上原章蔵、
母なみよの長男として生まれました。弟は一人、
妹二人の六人家族でした。家業は染物屋でした。
私は小学校を卒業したらすぐ丁稚奉公に出ました。
東京で菓子屋に奉公しましたがわずか一年でやめ
ました。

長野から東京に出るといのは、当時としては
珍しく、遠い所へ行くんだという気持ち強く、
独りでいるのが我慢できなかったのだと思います。
どこへ行って働くのも我慢する気がなければ駄目
だ、と親にこんこんと諭されて、今度は同じ県内
の松本市の捺染業で十人位いの職人を抱える所に
働きに行きました。捺染なっせんというのは長さ七メー
トル位の板の上に布地を貼り付け、その上に型紙を